

しにどういうわけか、ランプはまるでこまのように、ぐるぐるまわりはじめました。それもちゃん
と一所にとまったまま、ホヤをしんぼうのようにして、いきおいよくまわりはじめたのです。はじ
めのうちはわたくしもきもをつぶして、万一火事にでもなつては大変だと、何度もひやひやしまし
たが、ミスラ君はしずかに紅茶をのみながら、いっこうさわぐようすもありません。そこでわたく
しもしまいには、すっかり度胸がすわってしまって、だんだん早くなるランプ運動を、目もはなさ
ずながめていました。

またじつさいランプのかさが風をおこしてまわるうちに、きいろいほのほがたった一つ、またた
きもせずにもつているのは、なんともいえず美しい、ふしぎな見物だったのです。が、そのうち
にランプのまわるのが、いよいよすみやかになつていって、とうとうまわっているとは見えなほ
ど、すみわたつたと思いますと、いつのまにか、前のようにホヤ一つ歪いがんだ気色けしきもなく、テエブル
の上にすわっていました。

「おどろきましたか。こんなことはほんの子どもだましですよ。それともあなたがおのぞみなら、
もう一つ何かごらんにいれましょう。」

ミスラ君はうしろをふりかえって、かべぎわの書だなをながめました。やがてその方へ手をさ
しのばして、まねくようにゆびを動かすと、今度は書だなにならんでいた書物が一さつずつ動きだ
して、しぜんにテエブルの上までとんできました。そのまたとび方が両方へ表紙をひらいて、夏の

夕方にとびかうころもりのように、ひらひらとちゆうへまい上がるのです。わたくしは葉巻を口へ
くわえたまま、あっけにとられて、見ていましたが、書物はうす暗いランプの光の中になんさつも
自由にとびまわって、いちいちぎょうぎよくテエブルの上へピラミッド形につみあがりました。し
かも、のこらずこちらへうつってしまったと思うと、すぐにさいしよきたのから動きだして、もと
の書だなへじゅんじゅんにとびかえって行くじゃありませんか。

が、中でも一番おもしろかったのは、うすいかりとじの書物が一さつ、やはりつばさのように表
紙をひらいてふわりと空へ上がりましたが、しばらくテエブルの上で輪をかいてから、きゆうにペ
ージをざわつかせると、さか落としにわたくしのひざの上へさつとおりてきたことです。どうした
のかと思つて手にとつてみると、これはわたくしが一週間ばかり前にミスラ君へかしたおぼえがあ
る、フランスの新しい小説でした。

「ながながご本をありがとう。」

ミスラ君はまだ微笑をふくんだ声で、こうわたくしに礼をいいました。もちろんその時はもう多
くの書物が、みんなテエブルの上から書だなの中へまいもどつてしまつていたのです。わたくしは
夢からさめたような心もちで、暫時ざんじはあいさつさえできませんでしたが、そのうちにさつきミスラ
君のいった、「わたくしの魔術などというものは、あなたでも使おうと思えば使えるのです。」という
言葉を思い出しましたから、